

## いまの学びの終着点

### 六年 R・I

「ママ、なんで働くの？」働く母親の多くが幼い我が子からこんな質問を投げかけられた経験を持つ。

先日、何の気なしに新聞をめくっていると、このリード文で始まる一つの新聞記事が目にとまり、さらに読み進めてみたところ、次のように書かれていました。

「子どもが小学校にあがった時にもこの質問が出やすい。共働き家庭が当たり前の環境の保育園から、専業主婦家庭の子もいる小学校に入り、自分との「違い」に気付くためだ」

私がこの記事に親近感を抱いたのは、自分とこの子どもの描写がぴったりと重なったからなのだと思います。共働き家庭に生まれた私は幼少期を保育園で過ごしました。そして、私も小学校にあがって間もなくして周りとの違いに気がつき始めました。クラスの八割以上の子が幼稚園出身者であり、お母さんが家で学校から帰宅するのを待っているのがごく普通のことであると知った時の衝撃は今でも忘れられません。まだ親に甘えていたい年頃でもあった当時、私には「専業主婦のお母さん」という存在がとてもうらやましく思えたものです。

同時に私は、母が専業主婦でない理由が父の収入だけでは不十分であるからだと解釈し、周りより貧しいと思われる自分の家庭を情けなく、また恥ずかしく思うようになりました。恵泉に入学しても、周りの友達の父親の職業や住んでいる場所などを聞いては、今までに拍車をかけて家庭環境に差を感じ、私の劣等感は募るばかりでした。母が父親並みに仕事に励み、働いている。それは自分の家庭が裕福ではないことを意味しているとしか思えず、自分の中で隠しておきたい事柄の一つでもありました。しかし最近になってようやく、母が働いているのを肯定的にとらえられるようになってきました。その理由として、私自身が将来のことを考え、「働く女性」を格好いいと感じるようになり、惹かれ始めたことが大きいように思います。

高校生になってから、学校でも本格的に進路や将来のことを考える機会が多く設けられるようになりました。同級生の仲間は皆半ば強制的に卒業後に学びたいことを見つけ、そこから学部、大学を決めたことと思います。けれどもここで「何のために大学に行くのか」と問われた時に、明確な答えを持って即答

できる人は多くないのではないのでしょうか。高校卒業、大学進学という進路が一般的になりすぎるあまり、大学進学が形式的になり、進学の意味も分からないままなんとなく大学進学を志している人が多いのではないかということです。そして、その進路の不明瞭さが結婚したら仕事を辞めるという女性の選択に繋がっていると思うのです。

私は、高校までの学びの集大成は「大学受験に合格すること」ではなく、「大学卒業後に働いて、社会に貢献すること」だと考えています。「何のために大学に行くのか」と問われれば、私は「自分の可能性を広げるため」と答えます。大学を卒業したら、私たちは遂に一人前の大人として親から自立し、社会に出ることになります。その前に、自分の選んだ学問が本当に興味のあることなのか再確認して軌道修正しつつ、知識の幅を広げ、思考力や判断力をつけること、これが大学に進学する意味であると思うのです。

先程述べたように、高校卒業、大学進学といった流れが一般的になりすぎて、「大卒」という肩書で優遇されることもなくなりました。そして現在、大卒者同士が狭い就職口をめぐって争わねばならない、就職難の時代が訪れています。だからこそ、大学での学びの質が問われているのではないのでしょうか。

恵泉の創立者である河井道先生について学んだ時、女性が男性と同じように社会進出し、活躍していくことを先生が望んでいたと知りました。そしてこの時から私は自分も社会で活躍し、河井道先生の期待に応えられるような生き方をしたいと思うようになりました。しかし同時に、恵泉の卒業生であるという友達のお母さんたちの多くが専業主婦であるという傾向も知り、私は自分が思うような道を貫くのは難しいのではないかと危惧し、弱気になることもありました。私も将来仕事に就いた後で高所得の男性と結婚できたとしたら、必死に就職活動をしてまで手にした仕事であっても簡単に手放し、専業主婦になる選択をしてしまうのではないだろうかと不安になったのです。確かに、稼ぎのいい男性と結婚できたなら専業主婦というのは賢明な判断だと言えるのかもしれませんが。けれども私には才能や能力のある女性たちがそれを活かさきれていないように感じられて、もったいないと思わずにはいられないのです。新年度、新しいクラスのお母さんたちの間でクラス委員がなかなか決まらないという話をよく耳にします。金銭的利益がないことには無関心になりがちであるのが現実なのでしょう。しかし専業主婦であっても、子どもの学校のPTAやボランティア活動に積極的に携わることで、社会、そして多くの人と関わっていくこ

とができるはずです。

慶應大教授による「新書論壇」と称された記事に、今後の日本において専業主婦という身分は維持可能ではないと論ずる指摘が載っていました。記事によれば、専業主婦になる条件として最低でも年収七〇〇万円の男性との結婚が必要であるにもかかわらず、経済状況の鈍化による給与所得の伸び悩みが原因で、そうした男性が増える見込みは少ないのだそうです。

また、少子高齢化が進み、ますます労働力人口が減少するとされる現在の日本の状況において、私たち若い世代が働き、社会の財源を生み出し、国全体に回していくことが求められています。安倍政権の目玉政策の一つである「女性の活躍推進」もそれを目的としています。世の中の価値観が多様化し、女性の社会進出を奨励する動きが高まってきていることを私は嬉しく思います。よく「玉の輿に乗りたい」と軽々しく語る人がいますが、私たちに専業主婦になれるという保証はどこにもないのです。理想どおりに進まないことも多く、何かあるかわからないのが人生なのですから。「まだ高校生だから」と社会人になることをさも遠いこととして位置づけ、浅く考えがちな私たちではありますが、将来を見据え、長いスパンで働くことを覚悟して構えていなければいけないのだと感じます。

私の母はかれこれ二十五年近く保健師として企業に勤めています。平日五日間、朝八時頃から遅い時は夜八時過ぎまで来る日も来る日も働きに出る母をいつも近くで見えてきました。仕事で疲れているはずなのに、家ではいつも明るく疲れを見せずに家事に勤しむ母を私は尊敬しています。仕事が好きかどうかは別として、母は仕事を楽しんでやる努力をしているように見えます。そんな母の誠実な生き方が私に仕事に就くことの意識を高め、仕事を続けていく自信を与えてくれました。何事も、否定的にとらえ嫌々やるのではなく、前向きに積極的な姿勢で楽しさを見出していくことで自分の人生を有意義なものにしていけると教わったように思います。私はどんな職業であれ働いて社会に貢献しているということ自体が大きな価値を持っていると考えています。

六年生にとっては恵泉生活の集大成となる行事である、修養会が八月三十一日から九月二日までの三日間で行われました。最終日の礼拝で、「私たちは一人ひとり神様から使命を与えられていて、然るべき場所で輝けるように導かれている」と先生がおっしゃっていたのが特に印象強く心に残っています。自分の進む道が神様からの導きによるものだとするならば、大切なのは自分を信じ、

興味や関心の向くままに突き進んでみることもなのかもしれません。

ひとり一人に個性があり、よいものをたくさん持っている恵泉生だからこそ、社会でそれぞれの個性を活かして活躍してほしいと思っています。